

# ヨーロッパにおける CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) を利用した言語政策\*

工藤 洋路

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

小林 善知

(八王子市立宮上中学校教諭)

根岸 雅史

(東京外国語大学大学院)

## はじめに

本研究の最終目的は、TUFS 言語モジュールで学習可能な全言語に共通する言語能力記述モデルを開発することである。その先行研究として、和田・長沼・田中(2004)や和田(2004)において、Common European Framework of Reference for Languages (以下、CEFR)をはじめ、The Association of Language Testers in Europe (ALTE) Framework, American Council for the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) Proficiency, The National Curriculum for England, Canadian Language Benchmarks などの、既成の言語能力記述の枠組みについての概略が説明されている。さらに、これら欧米諸国において開発された枠組みの日本への適応可能性についても示唆している。例えば、ACTFL が開発した Oral Proficiency Interviews (OPI) を基に、日本において Standard Speaking Test (SST) が開発そして実施されていることから、その枠組みを検証する意義が認められる。また、TUFS 言語モジュールは Web Based Training (WBT) 教材であるが、CEFR に基づく Self-assessment Checklist などは WBT 教材との親和性が高いため、Self-assessment Checklist に見られる Can-do Statements も検証する意義が高い。このように、現段階では、欧米諸国で開発された言語発達段階の枠組みが、日本人学習者へ適用されつつある。その基礎研究として、言語発達段階の枠組みを、どのように教材やシラバスに適用していくことが望ましいかを検証する目的で、既成の枠組みを利用した言語政策について調査する。本稿においては、既成の枠組みとして CEFR を検証し、欧州諸国での CEFR を利用した言語政策について調査する。

---

\*本稿は、『21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」第9回研究会』(2005年9月2日、東京外国語大学)における発表を基に執筆された。

## 1. CEFR の特徴

CEFR は、The Council of Europe によって、ヨーロッパの言語教育シラバス、カリキュラムガイドライン、試験、教科書などの向上のための一般的共通基盤を作成する目的で開発されたものである。従って、CEFR は、言語発達段階が記述されているだけでなく、言語教育に関わる様々な場面で応用が可能であることも特徴である。さらに、欧州全土での言語政策の基盤となる枠組みであることから、多言語、多民族への適用を意図しており、日本人への応用可能性を探索する意義が認められる。特に、TUFSS 言語モジュールが目標とする多言語を対象とした枠組みと性質が似ていると言える。

CEFR の具体的な能力基準は 6 段階で表され、Can-do Statements を用いて能力の記述がなされている。個別言語を対象としていないので抽象的な記述になっている（資料 1 参照）。さらに、CEFR には、この 6 段階基準を利用した Self-Assessment Checklist が存在しており、学習者は技能別に自己評価を行うことが可能であると同時に、DIALANG という On-line で実施の Can-do Statements に基づいた自己診断式のテストも受験できる。TUFSS 言語モジュールは WBT 教材であるので、CEFR に基づく DIALANG を開発すべきテストツールのモデルとして考えることも可能である。

このような理由で、本稿では、既存の言語能力記述の枠組みとして CEFR を検証し、TUFSS 言語モジュールで学習できる全言語に共通の能力記述枠組みを開発するための示唆を行う。

## 2. ヨーロッパにおける CEFR を利用した言語政策

表 1 は、CEFR が欧州各国でどの程度利用されているのか、また、どの教育段階で利用されているのかを調査したものである。今回の調査で判明しているものだけで、欧州において CEFR を何らかの形で利用している国が 16 カ国存在する。国家政策レベルで CEFR を利用している国も 6 カ国存在し、今後、公式、非公式に関わらず CEFR を利用する予定の国もいくつか存在している。

表 1 欧州各国における CEFR の利用状況（2005 年 11 月時点で判明分）

	CEFR の利用	国家政策 レベルで の CEFR 利用	CEFR 利用の段階と対象学習者					
			初等	中等	高等	成人	職業	外国人
アイルランド	○				○			○
イタリア	○			○				
英国	○	○	○	○	○	○	○	
オーストリア	○			○				
オランダ	○	○			○	○		○

ギリシャ	○			○		○		
スウェーデン	○		○	○				
スイス	○							
スペイン	○		○	○	○	○		
デンマーク	○		○					
ドイツ	○	○	○	○	○	○	○	
ハンガリー	○	○	○	○	○			○
フィンランド	○							
フランス	○	○	○	○	○			○
ベルギー	○	○		○		○		
ポルトガル	○			○				

以下は、国家レベルで CEFR を利用している国のいくつかについて、言語教育政策の概略を調査した結果である。ここでは、英国、ドイツ、ベルギー・オランダについて参照し、CEFR の枠組みを具体的な言語政策に応用している事例を紹介する。

## 2-1. 英国

英国では国家レベルでの言語教育で CEFR を利用している。特色として、英国独自の言語能力認証基準である Language Ladder<sup>1</sup> を CEFR の参照レベルと対応させていることが挙げられる。また、国家資格<sup>2</sup> や一般資格のレベルと Language Ladder や CEFR のレベルを参照することが可能である。このシステムの下、特に強化されている政策は、初等教育における英語教育と職業教育である。CEFR の European Language Portfolio を積極的に利用している。

表2 Language Ladder と既存の資格、基準との対照表（ヨーロッパ日本語教師会 2005）

標準 達成 年齢	National Curriculum Levels 初等中等教育 (16 歳まで)	National Qualifications Framework 国家資格枠	General Qualifications 一般資格	Languages Ladder Stages 言語段階	C E F R
11 歳	1～3	Entry level	Entry 1～3	Breakthrough 1～3	A1 (A2)
14 歳	4～6	Level 1	Foundation GCSE	Preliminary	A2

<sup>1</sup> Language Ladder は英国独自の言語能力基準であり、全 14 段階の枠組みである。4 技能別の評価が可能であり、Can-Do 記述を用いており、さらに既存の資格レベルと参照が可能である（ヨーロッパ日本語教師会 2005）。

<sup>2</sup> 国家資格においても、国際的競争力を強化する目的で、資格のレベルが設定されている。例えば、レベル 1 は「基本的な知識、技術を、監督下で応用する能力を持っていること」で、具体的には、「自動車修理終了書」はレベル 1 に相当するとなっている（ヨーロッパ日本語教師会 2005）。

			grade D~G	4~6	(B1)
16 歳	7-Exceptional Performance	Level 2	Higher GCSE grade A+~C	Intermediate 7~9	B1
18 歳		Level 3	AS / A / AEA levels	Advanced 10~12	B2
		Level 4	Certificate	Proficiency 13 Mastery 14	C1 C2
		Level 5	Diploma		
		Level 6	Bachelors degree		
		Level 7	Masters degree		
		Level 8	Doctoral degree		

## 2-2. ドイツ

2000年のOECD学習到達度調査において、読解、数学、科学のすべてで20位以下という状況を受け、2002年にナショナル教育スタンダードを制定した。その中の言語教育についてはCEFRを積極的に利用している。CEFRは言語コミュニケーション能力を基盤としているため、CEFRを利用したことによって、それまでの語彙や文法を中心した伝統的な言語教育から脱却し、主にコミュニケーション能力を養成する政策へと変化した。特に外国語教育においてはCEFRを参照するために、外国語学習開始段階とCEFR基準の到達度を設定した。さらに、コミュニケーションの要素を強化するために、言語活動領域（「会話参加」、「やりとり」、「ききとり」など）も設定した。日本においても、伝統的な語彙や文法を中心とした言語教育についての問題点がしばしば指摘されることから、ドイツの事例を参照する意義が高いと思われる。

ドイツでは、このナショナル教育スタンダードを利用して、地域ごとに言語政策を実施している。OECDの調査で判明した全体的な学力低下とともに、地域学力差の問題が指摘されていることから、地域ごとに、ナショナル教育スタンダードを反映した言語教育シラバス、特に外国語教育のシラバスを作成している。表3は、テューリゲン州の外国語教育制度である。

表3 ドイツ・テューリゲン州の外国語教育制度（ヨーロッパ日本語教師会 2005）

学校区分	外国語		学年	必修 選択	言語活動 領域	到達 段階 CEFR
基礎学校 1~4年生	第1	英語、フランス語、 イタリア語、ロシア語	3~	必修	会話参加 やりとり ききとり	A1
普通学校	第1	英語	5	必修	全て	A2

5～9 年生						
普通学校 5～10 年生	第 1	英語	5～	必修	全て	B1
	第 2	英語, フランス語, ロシア語	7～10	選択 必修	全て	A2+
ギムナジウム <sup>3</sup> 5～10 年生	第 1	英語, フランス語,	5～	選択	全て	B1+
	第 2	ラテン語	7～	必修	全て	B1
	第 3	ギリシャ語, スペイン 語, イタリア語	9～	選択 必修	全て	B1
ギムナジウム 11～12 年生	第 1	ギムナジウム低学年の 言語を引き続き学習	11～12	選択 必修	全て	B2+
	第 2				全て	B2
	第 3				全て	B2
	第 4	その他の言語			全て	A2

### 2-3. ベルギー・オランダ

ベルギー・オランダ語共同体が 2001 年に発表した Adult Education Modern Languages Profiles は、CEFR との対照を可能にするために Can-do Statements を取り入れ、Profiles で設定したレベルを CEFR のレベルと整合させている。特に外国語教育に対しては詳細な枠組みを作成しており、その枠組みを利用したシラバスデザインも行っている。具体的には、ある言語において、あるレベルまで能力を到達させるために必要な授業時間数を規定し、それに基づき、技能や文法、語彙の学習に至るまでカリキュラムに含まれている。授業時間数については、全ての外国語について同一の時間数を設定するのではなく、言語によって目標に到達するための時間数が異なる点も特筆すべき点であろう。例えば、欧州言語については A1 レベルで 120 時間、A2 レベルで 120 時間を設定している一方、日本語・アラビア語・中国語などの日常生活で触れる機会が少ない言語の学習に対しては、A1 レベルで 240 時間、A2 レベルで 240 時間を設定している。TUFSS 言語モジュールについても、主専攻語、副専攻語、留学生にとっての日本語、日本人学生にとっての英語と、様々な言語レベルに対応する必要があるため、このようなカリキュラムは大いに参考になるであろう。

### 3. 考察

このように、欧州各国では CEFR を利用した言語政策がすでに始まっているが、国家政策のレベルで CEFR を利用している国に特徴的なことは、各国で独自の言語能力到達段階を作成し、それを CEFR と対照させていることである。国によって言語教育の目的や問題点、対象とする学習者が異なることから、まずは各国で自国の教育目的に見合った枠組み

<sup>3</sup> ギムナジウムはドイツの伝統的な中等学校であり、元来は古典語・古典的教養を重視し、大学接続する指導階層のための学校である。フランスのリセ、イギリスのパブリックスクールに相当する（『広辞苑第五版』より）。

を作成し、それを CEFR と適合させる方法が現実的な枠組み開発の手法と言えらう。言い換えると、CEFR は、客観的な基準として、他国で実施されている言語政策を検証し、それを自国の枠組みや言語政策と相互比較するための有効な道具と言えら。図 1 に見られるように、CEFR を仲介して、A 言語政策と B 言語政策を相互比較し、例えば、a テストと b テストに共通の項目を選定することによって、両テストを改良することが可能となる。また、B 言語政策の下で b3 教材を終了段階にある学習者が、A 言語政策を実施している国へ移住した際には、a7 教材から学習を再開することで、学習の一貫性が保たれることになる。この点において、CEFR の利用価値が高く認められる。

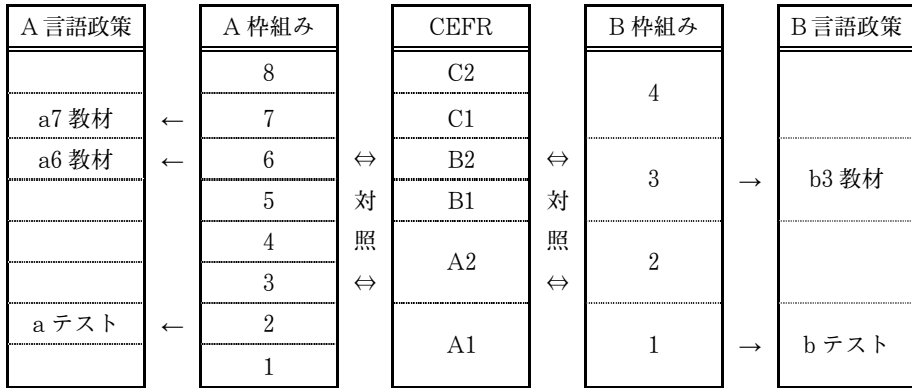


図 1 CEFR を利用した言語発達段階の枠組みの相互比較モデル

今回の調査では、欧州各国の独自の枠組み（英国の Language Ladder など）と CEFR との対照表を開発する際に、どのような開発デザインを組み立てたのかを調査するまでに至らなかった。今後の課題として、様々に記述され、段階付けされた言語能力基準の整合性を、成就された言語政策では、どう規定したのかについての検証を行う必要がある。同時に、表 1 に見られるように、学習者種別によって、CEFR を適用している場合とそうでない場合がある。ドイツの例では、学力低下を阻むために、初等・中等教育を重要視している一方、ベルギー・オランダでは、成人教育と生涯教育に力点を置いている。また、枠組み開発の対象は母国語、第二言語、外国語の学習のどの種別なのかについては、カリキュラムデザインをする際に、学習開始時期や目標言語に日常的に接触する頻度などを考慮する際に、重要な観点になる。特に TUFSS 言語モジュールを想定すると、外国語学習が研究の対象となるため、欧州でのアジア言語に関わる政策などについて詳細に調査する意義が認められる。

TUFSS 言語モジュールで学習可能な言語の発達段階の枠組みを開発する際には、言語能力の記述をどこまで具体的にを行うかが問題となる。CEFR に見られるように、より多くの言語に共通する言語能力発達段階の記述を試みればみるほど、記述が抽象的にならざるを得ない。例えば、文法に関して言えば、ある言語に特定の文法項目についての発達段階を記述することは、他の言語への応用が不可能であるので望ましくない。最終的に求められ

る記述は、TUFSS 言語モジュールで学習可能な全言語に共通の記述であるため、全言語の最大公約数を算出するような形態で、発達段階記述を実施していくことになる。その結果、抽象度あるいは一般度が高い記述が求められるが、逆に、その記述をある言語の能力評価やシラバスデザインの際に、直接的に利用することは困難であり、その言語に特有の能力記述を再度行う必要性が生じるという矛盾が認められる。抽象度と一般度が高い枠組みを開発する一方で、英国やドイツでの政策に見られたように、各言語でも独自の具体的な枠組みを作成し、それを全体的な枠組みと整合させるという開発手順が現実的であろう。

本稿では、ヨーロッパでの CEFR を利用した言語政策を概観したが、CEFR は個別言語を対象とした枠組みではないため、汎用性が高いと思われる。従って、日本における言語教育にも利用できる可能性が高いことから、さらなる検証が必要である。

#### 【参考文献・資料】

欧州各国教育省ホームページ。(詳細省略)

ヨーロッパ日本語教師会。(2005)『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』国際交流基金。

和田朋子。(2004)「TUFSS 言語能力記述モデル開発のための試み：Common European Framework (of Reference for Languages) の考察」『言語情報学研究報告』No. 5, 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム, pp.89-102.

和田朋子, 長沼君主, 田中敦英。(2004)「言語能力の発達段階記述について」『言語情報学研究報告』No.2, 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム, pp.95-110.

The Council of Europe. (2001) *Common European Framework of Reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

資料 1 CEFR の Global Scale

Proficient User	C2	Can understand with ease virtually everything heard or read. Can summarise information from different spoken and written sources, reconstructing arguments and accounts in a coherent presentation. Can express him/herself spontaneously, very fluently and precisely, differentiating finer shades of meaning even in more complex situations.
	C1	Can understand a wide range of demanding, longer texts, and recognise implicit meaning. Can express him/herself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. Can use language flexibly and effectively for social, academic and professional purposes. Can produce clear, well-structured, detailed text on complex subjects, showing controlled use of organisational patterns, connectors and cohesive devices.
Independent User	B2	Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialisation. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.
	B1	Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst travelling in an area where the language is spoken. Can produce simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. Can describe experiences and events, dreams, hopes & ambitions and briefly give reasons and explanations for opinions and plans.
Basic User	A2	Can understand sentences and frequently used expressions related to areas of most immediate relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local geography, employment). Can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar and routine matters. Can describe in simple terms aspects of his/her background, immediate environment and matters in areas of immediate need.
	A1	Can understand and use familiar everyday expressions and very basic phrases aimed at the satisfaction of needs of a concrete type. Can introduce him/herself and others and can ask and answer questions about personal details such as where he/she lives, people he/she knows and things he/she has. Can interact in a simple way provided the other person talks slowly and clearly and is prepared to help.